

【資料紹介】

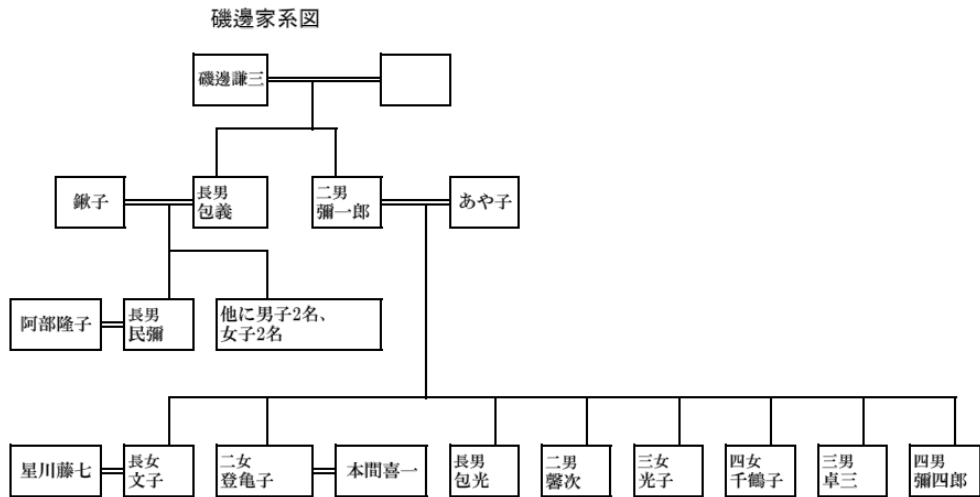
本間喜一の妻・登亀子の家系図について

愛知大学総合郷土研究所事務室 小林 倫幸

今回の資料紹介は、本間喜一の妻登亀子の実家磯邊家について紹介する。

1. 本間喜一の妻の実家である磯邊家系図

(下の参考資料をもとに筆者が作成した)



登亀子は1897(明治30)年、父磯邊彌一郎と母あや子の二女として生まれた。磯邊彌一郎は1861年豊後国(現在の大分県)で生まれ、その後上京し、1888(明治21)年東京市神田区(現在の東京都千代田区)で国民英學會という英語学校(私塾)を設立した人物である。

彌一郎の兄磯邊包義は海軍少将・貴族院議員であった。その長男磯邊民彌は明治生命初代頭取阿部泰蔵(泰蔵の父は愛知県鳳来町の豊田鉦剛で三河吉田藩の藩医であった阿部三圭の養子となる)の二女隆子と結婚した。また三女の阿部とみは元慶応義塾大学塾長小泉信三夫人である。

登亀子の姉磯邊文子は元東京府農工銀行頭取(現在のみずほ銀行)星川藤七(愛知県新城市出身)夫人である。

本間喜一の娘殿岡氏は磯邊家と阿部家は親戚関係にあることから「阿部家からお古の服、ベッド、机が回ってきて、現在は(殿岡氏の自宅に)机だけが残っている。そしてその机は桜の木の素材で重く、片袖の引き出しに水晶の取っ手が付いている。」とのエピソードを明かした。

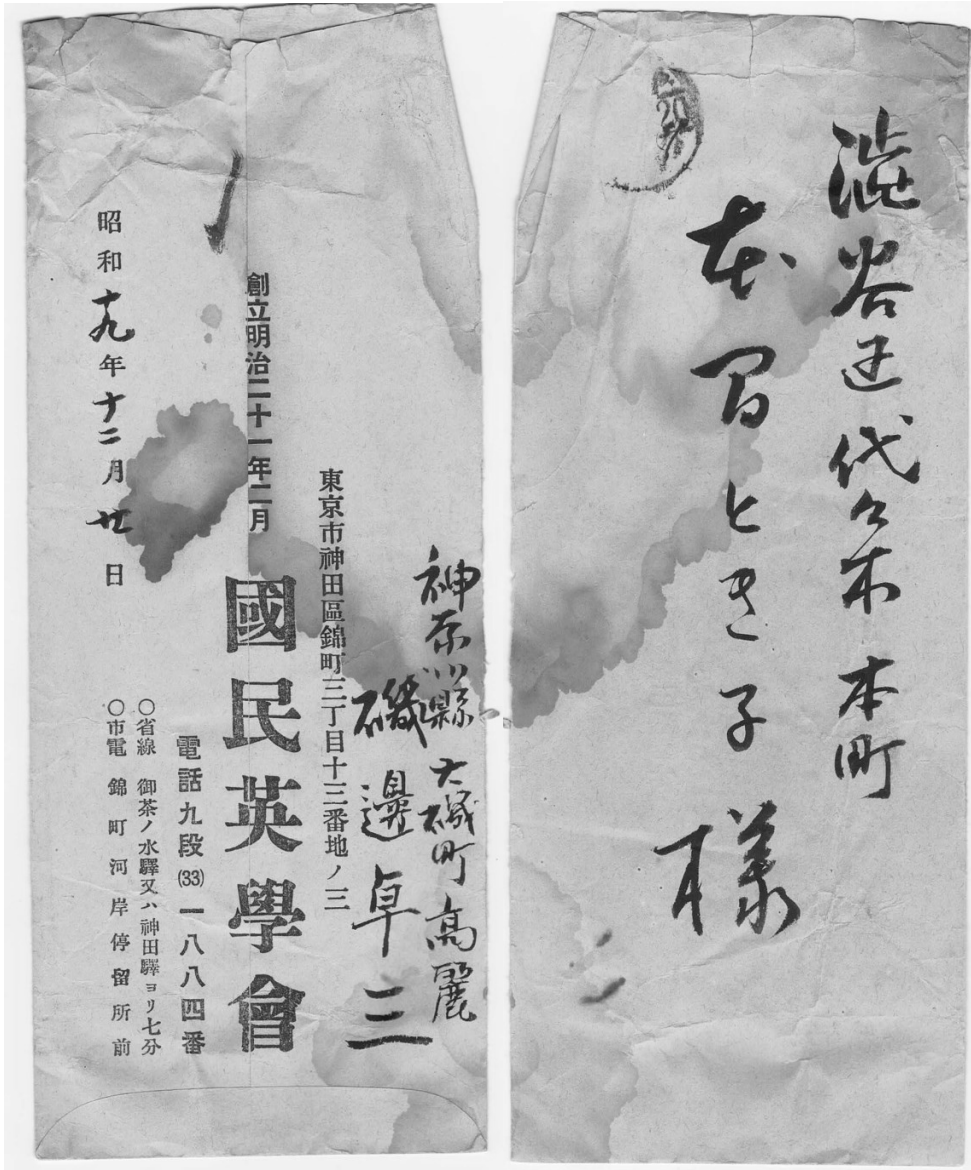
参考資料

小泉妙 2008年『父小泉信三を語る』慶應義塾大学出版会 38頁

杉本正幸 昭和2年『全國農工銀行發達史』全國農工銀行發達史發行所 917 頁  
 佐藤巖編著 大正3年『大分縣人士錄』大分縣人士錄發行所 26~29 頁、136~139 頁  
 原田道寬編 大正4年『大正名家錄』二六社編纂局 ア 10 頁、イ 69 頁  
 昭和2年『新日本史』萬朝報社 508 頁  
 昭和3年『人事興信錄』人事興信所 ア 22 頁、イ 170 頁  
 昭和14年『人事興信錄』人事興信所 ホ 8 頁  
 静岡新聞社出版局編集『静岡県歴史人物事典』静岡新聞社 平成3年 21 頁

## 2. 磯邊家に関する資料

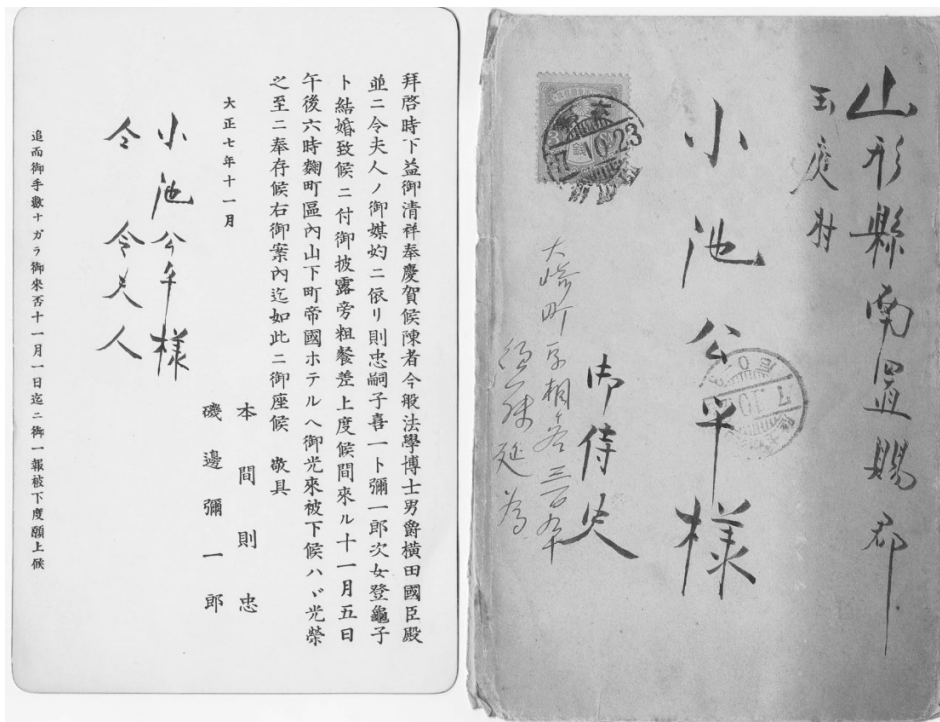
■写真1：「國民英學會」の資料として掲載（弟卓三から姉登亀子への書簡）



登亀子の父磯邊彌一郎は1888(明治21)年東京市神田区(現在の東京都千代田区)アメリカ人イーストレーキーと協同で國民英學會を設立した。学校であるにも関わらず何故学会と称したのであるか。その理由は磯邊彌一郎著『國民英學會創立三十周年回想録』(國民英學會出版局 大正7年1~2頁)に「國民英學會は純然たる學校なり、普通に意味する學會とは全く其組織を異にせり、然らば何故に之を校とせず、會と稱するやと言ふに、これには仔細あり、我々設立者の目的とする所は昔の漢學塾の如く師弟相親しみ同窓相愛し、こゝに和氣霽然たる家塾の如きものを造らんとするに在り、殊に英語は教室に於ける課業のみにては不十分なり、授業時間外と雖も、教師と生徒と成るべく相接觸し、定住不断英語練磨の機會を生徒に與へたし、然るに學校の組織にては動もすれば形式に流れ易く、師弟の親睦を圖る上に於て遺憾なしとせず、言はば英語に熱心なる人々の一團體たらしめんとて、會の名稱を用ひたるなり」と記載されており、磯邊の教育に対する深い思いがこの学校名に込められている。

■写真2：本間喜一と磯邊登亀子の結婚式招待状

(本間則忠と磯邊彌一郎から本間喜一の兄小池公平夫妻宛に送られたもの)



この結婚式は横田國臣夫妻の媒酌により、大正7年11月5日帝國ホテルにて行われた。横田は豊前国宇佐郡横田村(現在の太宰府市)で生まれ、その後、明治13年検事、明治31年検事総長、明治39年判事となり、同年大審院院長(任期：明治39年7月3日~大正10年6月13日)に就任した。従ってこの結婚時は大審院院長であったことが判る。

本間喜一は父小池熊吉の二男であったが、叔父本間則忠の養子となり、本間姓となった。

参考資料

- 最高裁判所事務総局編 平成2年『裁判所百年史』最高裁判所事務総局 536頁
- 佐藤巖編著 大正3年『大分縣人士録』大分縣人士録發行所 61~66頁
- 原田道寛編 大正4年『大正名家録』二六社編纂局 35頁